Poster Session

Fri. Nov 20, 2026 2:00 PM - 3:00 PM JST | Fri. Nov 20, 2026 5:00 AM - 6:00 AM UTC | ポスター5

Poster Session 10 Inflammatory Bowel Disease 1

座長：山本 章二朗（いきめ大腸・肛門外科内科）

[P10-7] Discrepancy Between Radiological Response Assessment and Histopathological Response After Neoadjuvant Therapy for Mucinous Adenocarcinoma of the Rectum and Anal Canal

*Kenta Fukuda[1] (1. Osaka University Hospital Department of Gastroenterological Surgery)

【目的】
粘液癌は大腸癌の3–10%を占める稀少組織型であり, 通常型腺癌と比較して化学療法および放射線療法に対する感受性が低く, 予後不良とされる. 一方で, 術前治療後も粘液成分を反映した腫瘍像が画像上残存しうることから, 画像学的効果判定と組織学的治療効果が乖離する可能性がある. 本研究では, 直腸肛門管粘液癌に対する術前治療後のRECIST評価と組織学的治療効果の関連を検討した.
【方法】
2011-2025年までに当院で術前治療を施行した, 病理診断上mucと記載された直腸肛門管粘液癌25例を対象とした. Total neoadjuvant therapy例および病歴詳細不明例は除外した． 画像学的治療効果はRECISTに基づき評価し, CR/PRを奏効, SD/PDを非奏効と定義した. 組織学的治療効果ではGrade1b以上を奏効と定義した. 各症例において画像学的奏功の有無と組織学的奏効の有無を対応させ, 両者の一致・不一致を検討した. さらに, 術前治療内容によりCRT群と化学療法群に分け, 乖離症例の分布を検討した.
【結果】
年齢の中央値は55歳であり, 性別は男性/女性は19/6例であった. 腫瘍主座（Ra/Rb/P）はそれぞれ1/15/9例であり, 術前治療例はCRT群14例, 化学療法群11例であった. cT4b症例はCRT群 36.3%, 化学療法群 30.0%であり, N陽性症例はCRT群 54.5%, 化学療法群 70.0%であった. 画像学的効果と組織学的治療効果の不一致は13例(52.0%)と約半数に認めた. 画像学的非奏効にもかかわらず組織学的奏効を示した症例は, CRT群で12例中10例(83.3%), 化学療法群で9例中1例(11.1%)であった. 各治療群全体における組織学的奏効率もCRT群で有意に高かった（85.7% vs 9.1%, p<0.01）.
【結語】
本検討では, 直腸肛門管粘液癌において術前治療後の画像学的効果判定と組織学的治療効果に乖離を認めた. CRT後では画像学的非奏効例であっても組織学的奏効を示す症例が多く, 画像評価のみでは治療効果を過小評価する可能性が示唆された.

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会